



高大連携事業の実践—「ライティング・ゼミナール」の事例—

メタデータ	言語: 出版者: 宮崎大学教育学研究科教職大学院 公開日: 2023-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 湯田, 拓史, 竹内, 元, 深見, 奨平 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/0002000010

高大連携事業の実践

—「ライティング・ゼミナール」の事例—

湯田 拓史ⁱ・竹内 元ⁱⁱ・深見 奨平ⁱⁱⁱ

要旨

2021年度から宮崎大学教職大学院の教職実践高度化コースと教育学部教職実践基礎コースの教員は、宮崎県の県立高等学校との協働事業として、「ライティング・ゼミナール」を実施している。対象者は、ひむか共創人財育成塾・教師みらいコースに参加している高校生と宮崎県立高鍋高等学校の高校生である。いずれも PISA 型読解力や大学入試等でも問われるようになった「論証」を視点とした、複数の大学教員による課題作文に対する指導助言である。本稿では、湯田担当回での講義内容と工夫点を述べる。湯田担当回では、論述に必要な基本的思考、とくに概念自体への理解と簡単な概念操作ができるような内容とした。実践での工夫点は、高校の数学 I の集合論との関連性を強調することで、ライティングに数学的思考が役立つことを実感できるようにしたことと、概念の内包と外延の構図を示しつつ、身近な生活での話題を題材に、高校生たちがとりつきやすくしたことである。

1. 実践の概要

高校生のためのライティング・ゼミナールは、ひむか共創人財育成塾・教師みらいコースと連動して開催した。実施日は、2022年8月9日16:30-17:30である。論述のテーマは、「ICTの推進により求められる学校の役割とは何か」である。参加した高校と参加者数は、表1「参加校一覧表」のとおりである。宮崎県内の県立高校から幅広く参加した。講師を担当した宮崎大学の教員は、以下の4名である。

表1 参加校一覧表

学校名	名
延岡高校	1
日向高校	2
五ヶ瀬中等教育学校	2
宮崎南高校	2
高鍋高校	1
宮崎西高校	1
計	9

○小林博典（宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター／准教授）

○竹内元（宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター／准教授）

○深見奨平（宮崎大学教育学部・教職実践基礎コース／講師）

○湯田拓史（宮崎大学大学院教育学研究科・教職高度化コース教育行政・学校経営分野／准教授）

指導助言の概要は、以下のとおりである。

「ICTの活用が推進されるならば、〇〇という役割が学校に求められる」の対偶は、「ICTの活用が推進されないなら、〇〇という役割が学校に求められる」になる。一つには、問題を解くにあたって、対偶を明らかにして、問題の趣旨を理解する必要がある。

ⁱ 宮崎大学大学院教育学研究科

ⁱⁱ 宮崎大学大学院教育学研究科

ⁱⁱⁱ 宮崎大学教育学部

さらに、自分が使っている概念が示す範囲を意識する必要がある。その際、根拠が対比している世界をイメージできているかも問われている点に注意が必要である。自分が使っている概念が、相手にどのように伝わっているかを意識する。国語辞典などを使って、自分の言葉を区別して使う必要がある。辞典は、わからない言葉を調べるだけでなく、自分が使っていることばを調べることに使うものでもある。

二つには、読む側、聴く側の立場に立って、自分が書いた文章がどう伝わるかを自分自身でメタ的に考えているかどうか、読み手には読まれているということを意識する必要がある。読む側の立場に立って、何をどのように書くかを構成することが求められている。

(1) 自分が使う言葉や概念の意味内容を整理しているか。

(2) 本論の一文目や結論に書く情報は、重要なものであるかどうかを検討しているか。

以上は、文章を書いた後に考えるのではなく、文章に書く前のプロットを各段階で検討することでもある。

なお、日本語として文章が書けているかどうか。文章表現に一貫性があるかどうか。主語の不一致、ですます調とである調の混同はないか。自分の文章を読み直して相手に違和感がないかを文章を書いた後に検討していないと、内容までは読んでもらえていないことがある点は注意してほしいとも指摘があった。

三つには、論述は、主張を明確に伝えるために、観点を絞り、キーワードで焦点化する必要がある。また、誰のために主張するかを明確にし、読み手を意識していくことも求められる。その際、身近なところに題材を探し、具体的な事例を根拠に挙げると説得力が増す。いきなり学校のことから書き始めるのではなく、不穏検知といったデジタルホスピタルなど幅広い社会への視野も求められる。あるいは、ネガティブな情報に加えて、そうした問題をどのように乗り越えていくかという情報にもアクセスできることが期待されている。

高鍋高等学校と協働した「ライティング・ゼミナール」は、以下のように実施した。

1回目 9月21日 11:40-12:40 参加者9名

テーマ「自分自身が小学生低学年だった頃と現在の子どもの生活の変化」

テーマ「これからの社会で求められる主体的な学びのあり方について論述せよ」

第2回 11月9日 15:05-15:55 参加者10名

テーマ「部活動の外部委託の功罪」

高鍋高等学校での講師は、第1回も第2回も竹内元、深見奨平、湯田拓史の3名である。なお、高鍋高校は、『はじめよう、ロジカル・ライティング』（名古屋大学教育学部附属中学校・高等学校国語科、ひつじ書房、2014年）をテキストに用いている。

11月9日の指導助言の概要は、以下のとおりである。

今回のテーマは、「部活動外部委託の功罪について、あなたが考えるところを述べなさい」であったが、テーマの解題が必要である。主題の理解の深さが論述に現れる。

このテーマは、「スポーツ庁が休日の活動を社会教育に移行する方針を提言している。中学校における部活動を社会教育や民間団体に委託するという施策等を実行した場合に、どういう成果が出るか（メリットがあるか）、どういう失敗が出るか（デメリットがあるか）について、あなたが考えるところを述べなさい」と理解するのである。その分野の昨年度の動向をきちんと押さえる必要がある。

前回は、根拠がなく主張だけをしている論述もしたが、今回は、主張と根拠はある。ただ、主張と根拠があるだけでなく、主張と根拠をどのようにつなげているかに意識があるかが問われている。根拠となる、自己の経験や他者の意見、数量的なデータをどのように解釈しているか、根拠と主張をつなぐ筋道は確かか、接続詞は適切に使われているかなどを検討する必要がある。主張の新しさやユニークさが評価されるのではなく、ロジカルなコミュニケーションができる人かどうかが見られている。

2. 実践の工夫

2-1. 論理学の「対偶」から題目に対する自分の回答の適合性を判断する。

高校生へ提示した題目は、「ICTの活用が推進されるなかで、学校に求められる役割とは何か、あなたが考える所を述べなさい」である。対偶を見れば、テーマに適合した内容かどうかの判断が可能となる。なお、命題と命題をつなぐ「ならば」は、論理学の「条件法」の一つである。今回の命題は「ICTの活用が推進されるならば、〇〇という役割が学校に求められる」であり、逆は「ICTの活用が推進されるならば、〇〇という役割が学校に求められない」、裏は「ICTの活用が推進されないなら、〇〇という役割が学校に求められる」、対偶は「ICTの活用が推進されないなら、〇〇という役割が学校に求められない」となる。

以上の逆・裏・対偶のうち、対偶を考慮して今回の高校生たちの原稿を検討した。

「コミュニケーション能力の向上」や「生徒の可能性を広げる」と書いている原稿があったが、これらはICTの活用推進にかかわらず学校に求められる役割である。したがって、今回のテーマから外れる。一方で、「新しいコミュニケーション・ツールの使い方（活用）」と書いた原稿があった。これは、ICTの活用推進という条件に即しており、今回のテーマに適合していることになる。ここでは、さらに「概念階層」をチェックすることも加えた。「モラル」について書いた生徒がいたが、「モラル」だとICTの活用推進にかかわらず学校に求められる役割となり不適である。だが、「情報モラル」になるとICTの活用推進という条件に即しており、テーマに適合しているので「情報モラル」に訂正すべきである。

なお、当日の高校生への配布資料には、用語説明を記述した。鍵概念である「対偶」とは、「〈もとの命題の主語と述語を、それぞれ否定して、いれかえた命題〉を《もとの命題の対偶》という。《AはBである》に対し《BでないものはAではない》が対偶」である。(1)

2-2. 内包と外延

高鍋高等学校での第1回テーマは、「自分自身が小学生低学年だった頃と現在の子どもの生活の変化」と「これからの社会で求められる主体的な学びのあり方について論述せよ」の2題である。これら2つの題目は、両方とも時間軸上の概念変化を問う問題であり、過去から現在までの概念の変遷を尋ねる問題である。(図1「過去から現在までの変遷、現在から未来の展望を示した図」を参照)「変遷」とは、時間の経過と共に移り変わることである。概念の変遷は、厳密には時間の経過と共に概念の「内包」と「外延」の構図が変わることを指す。高校生は、「2) 未来の概念の展望」を書いてしまうことがあるので、過去・現在・未来のいずれのことを書けばよいのかを判断するのがポイントとなることを伝える。

2-3. ライティング・ゼミナールで高校生への示した題目「部活動の外部委託の功罪」

小論文では、出された題目を正しく理解しているかが問われる。題目で問われていることを逸脱してしまうと全く評価されない。今回の題目である「部活動の外部委託の功罪」については、

次の4つがポイントとなる。「1. お題は、「功罪」なので、「功績」と「罪過」でパラグラフを分ける」、「2. 概念を理解しているか。『部活動』は、教育課程外の活動である。法令上、学校が設置、運営する義務とはされていない。しかし、生徒の多様な学びの場として教育的意義が大きいことから学校の教育活動の一環として計画、実施されていることを理解しているか」、「3. 部活動改革の構想について、日頃から情報収集しているか」、「4. 中学校に限定して高等学校は除外する。理由は、高等学校は義務教育ではなく、学校経営の独自性として部活動特化を打ち出す私立学校が多数有るから」である。

高校生から提出された小論文では、10名中8名が「教員の働き方改革」の観点から賛同したが、外部を「地域住民」とした者が1名いた以外、委託先の「外部」が曖昧であった。このことが、前述の説明をすることになった根拠である。また、スポーツ庁の提言を認識していたのが、10名中4名であり、普段から新聞等を読んで情報収集をしていたことがうかがえた。10名中2名が否定的であった。それは「教員の働き方改革」が外圧であることを認識していなかったことと、部活動が教育課程に含まれているとの誤った認識を基に論を展開していたことから、別途「教員の働き方改革」と部活動が教育課程外であると説明することが必要である。

模範解答例として、今回の題目の「功績」とは、教員の負担軽減である。また専門性が高い外部指導者による技術力の向上が期待できる。一方で「罪過」は、将来構想で委託先の外部をどこに設定するかで異なる。委託先が「社会教育」ならば、地域のスポーツ団体が盛んか否かで地域間格差が生じる。地域住民や保護者の負担が増える可能性がある。委託先が「営利法人」ならば、新しい産業として「部活動」が位置づけられる。高度な指導が期待できるが、営利活動なので「レッスン代」等の費用がかかる。

今回は、部活動の外部委託が強く推進されている事情を知らない生徒がいた可能性があることから、難易度が高い題目としてとらえられた可能性がある。常日頃から図書館で新聞や雑誌に目を通しておく習慣が求められることを高校生に伝えた。

3. 課題

高校側で、事前に関連教科の教諭及び学校図書館司書教諭とで協議して、関連する教科の授業での確認や強調、辞書や事典の用意をしていただくと効果がより増すと考える。とくに論理学は、数学Ⅰの集合論での「オイラーの図式」が基礎知識として欠かせない。高校側のスタッフに数学教諭が含まれていることが望ましい。最新の教育事情は、教育キーワード集や『日本教育新聞』などの業界紙を高校側が学校の図書室に配置して、常に高校生の視野を広げるような環境を整備することが求められる。

大学側も「教師未来セミナー」などの出前講座を積極的に行うことで、広く社会に教育事情を知らせることが重要となる。ただし、本務に支障が出ないように、コロナ感染症対策が沈静化した後も遠隔配信方式での実施が望ましい。そのためには、大学と高等学校の双方でビデオカメラやスイッチャー等の配信設備の充実が課題となる。

¹ 思想の科学研究会編『新版 哲学・論理用語辞典』1995年、三一書房、264頁